Ça va? ⊆⊇⊇⊆⊇⊆⊇⊇⊇⊆⊇ ゲンズブール ⊆⊇⊆⊇⊆⊇⊆⊇⊇⊆⊇Junko Higasa

私は画を描くときに、その気になるまで始めない。感覚の中で「今だ」と思う時に描き始める。そういうときは頭の中が自然に無意識状態になる。きょうはそういうサラな頭の中に突然浮かんできたものがあった。それはセルジュ・ゲンズブールの「ラ・ジャヴァネーズ(La Javanaise)」だった。「憚りながら言わせてもらおう。ジャヴァネーズを踊っている間、俺たちは愛し合っていた」俺の愛を望んで俺の愛を手に入れておきながら去って行った愛。それは「枯葉に寄せて(La chanson de Prévert)」の「来る日も来る日も去って行った愛たちは完全に消え去ってはくれない」に重なる。内気なゲンズブールの愛はいつでも素直で優しかったのだろう。いうなれば純粋に「愛」そのものであったのだろう。世間の目には臆病に、あるいは大胆に見えるけれど、彼はいつでも愛に正直に応えていたのだろうと思う。私の中に自然な透明感が浸透する。そんなことを考えているうちに私の頭の中に先だって観た「ノーコメント by ゲンズブール」の中のいくつかの歌がフラッシュバックした。「ジキル博士とハイド氏(Docteur Jekyll et Hyde)」「アニーとボンボン(LES SUCETTES)」そしてゲンズブール自身が「好きだ」と言っていた「マノン(Manon)」

随分前に訳してみた「ジキル博士とハイド氏」には「世間での自分と本当の自分」という彼の職業的生活の二面性が重なる。つい先日訳してみた「アニーとボンボン」は一見可愛いようで、これもまた表現的になかなか興味深かった。そして今日はふと「マノン」も訳してみなければという気が起った。何故なら私の感覚の中で、この歌は彼の愛の根源を教えてくれそうな気がしたので。そして何故ゲンズブールがその歌を「好きだ」と言ったのかも知りたくて。因みに私は買った CD の全曲を聴くことは稀である。その中の良い曲に気付かず放置してあるのは全く惜しいことだが。

そして私は例によって「マノン」もしっかり聴いたことはなかったのだが、改めて聴いてみて、その中に女性に対する愛ではなく、ゲンズブール自身の姿を垣間見た。自分の中に嫌いな部分がある。けれど愛する自分。そしてもしその嫌いな部分がなかったら、彼は自分の人生を失っていただろう。そう、常に自分の深淵な部分に、自分という根源に立ち戻ることがなかったら彼は狂っていたかもしれない。彼だけでなく、世間に自分をさらす職業を持っている人は、おそらくみんな。

そこで私は思い出す。不遇の中の孤独を引き受けて、自力を振り絞って生き抜かねばならない人たちの純粋な愛のパワーを。孤独の中から自分を立ち上げる人たちの愛の透明感を。けれどその愛に翻弄される皮肉な孤独を。その人たちは自分という根本に立ち戻ることが出来るからこそ、いつでも先へ進めるのだということを。そして常に世間の中の自分の虚像と戦いながら先に進まなければいられないのだということを。『愛されたくないが愛されたい』自分に向けた自分自身の愛を失わないために。

「愛」といえばエディット・ピアフの「無私の愛」がいつでも賞賛されるが、彼女の愛は「自ら与える愛」 けれどセルジュ・ゲンズブールの愛は「愛に応えて与える愛」ピアフの愛には形がなく、ゲンズブールの愛には色がない。彼はその透明な愛のパズルの中に「韻を踏む言葉遊び」という色彩を持つピースを散りばめる。もし彼が心の中に孤独を抱えていなかったら、あれほど言葉遊びには凝らなかったろうと思う。それは才能の発揮であると同時に、孤独を癒す処方の一つなのだと思う。 (2013.8.18)

⊆⊇⊇⊆⊇⊆⊇⊇⊇⊆⊇⊆⊇⊆⊇⊆⊇⊇⊆⊇⊆⊇⊇⊆⊇⊇⊆⊇ ***Ça va, merci. Et toi?***